

学位請求論文審査報告要旨

2019年7月10日

申請者 冉 露芸
論文題目 文法教育における母語転移の扱い方
—中国語話者のアスペクト・テンスの習得—

論文審査委員 庵 功雄
太田陽子
稲垣俊史

1. 本論文の内容と構成

本論文は、現代日本語のアスペクト形式「ーている」（テイル形）の進行中用法と結果残存用法を取り上げ、中国語話者に対する日本語教育への応用を目的として、中国語話者にとっての産出の困難点およびその理由を精密に検討したものである。テイル形はアスペクトを表す代表的な形式として日本語学において数多くの研究の対象となっている一方、中国語話者を対象とする第二言語習得研究においても、近年活発に議論されている分野であり、本論文の内容は、そうした習得研究に重要な方向性を与えると同時に、日本語教育文法研究に具体的かつ有力な研究手法を提案するものとなっている。

本論文の構成は次の通りである。

第1章 序論

- 1.1 研究動機
- 1.2 研究目的
- 1.3 研究方法
- 1.4 本論文の構成と各章の概要

第2章 文法教育と母語転移

- 2.1 文法能力の習得と指導
- 2.2 母語転移の働き方
- 2.3 文法教育のための方法論の提案
- 2.4 本研究における課題

第3章 アスペクト・テンスに関する先行研究と問題点

- 3.1 アスペクトとテンスにおける日中対照研究
- 3.2 日本語のアスペクトに関する習得研究
- 3.3 残された課題
- 3.4 対照研究の再考察

第4章 中級学習者のアスペクト・テンスの習得における内面観察

- 4.1 質的な調査
- 4.2 調査結果
- 4.3 考察
- 4.4 本章のまとめ

第5章 アスペクト・テンスの習得における発達タパーンの考察

- 5.1 量的調査
- 5.2 調査結果
- 5.3 各タイプにおける習得状況の考察
- 5.4 発達パターンと母語転移の考察
- 5.5 本章のまとめ

第6章 母語を最大限に生かした文法記述研究の一試案

- 6.1 文法記述研究
- 6.2 現行記述上における問題点
- 6.3 文法記述の試案
- 6.4 本章のまとめ

第7章 本研究のまとめと今後の展望

- 7.1 本研究のまとめ
- 7.2 本研究の意義
- 7.3 今後の展望

参考文献

巻末資料

資料Ⅰ 調査対象とする教科書リスト

資料A 教科書リスト

資料B 各教科書のテイル形の分類・導入課数・例文

資料Ⅱ 文法テスト

資料A 第4章で用いた文法テストⅠ

資料B 第5章で用いた文法テストⅡ

2. 本論文の概要

本論文は7章からなる。

第1章では、本研究の研究動機、主要概念の定義などが述べられる。

筆者は、文法教育は言語習得において重要な課題であり、一度学習したもののなかなか習得に至らない文法項目には明示的な文法指導が必要であるという立場に立ち、学習者の母語転移を習得過程における大きな要因の一つとして取り上げている。その中で、本章では、学習者の習得過程における母語転移の可能性を見直し、それが文法習得に与える影響

から、従来の母語転移の考察を目指す対照研究や習得研究の問題点を取り出し、母語を最大限に活かした日本語教育文法研究を行うことが示される。

母語転移を活かす教育文法を考える際に課題となるのは母語転移を正確に捉えることである。中間言語理論では、学習者の言語体系は母語から段階的に目標言語に近づいていくため、母語転移が学習者に与える影響は目標言語の習得過程において動的に変化していると考えられている。そのため、習得過程における母語転移の働き方を把握する上で学習者の中間言語体系を解明することも重要であることが指摘される。

第2章では母語転移を考察する方法が検討される。

従来の言語形式に注目する対照研究や学習者の習得状況に注目する習得研究では、あらゆる母語転移を確実に観察することはできない。それは、対照研究では習得過程における母語転移の働き方が考察できない可能性があるのに対して、習得研究だけでは母語転移の具体的な働き方を把握できないからである。すなわち、学習者の習得過程に母語転移が対照研究の結果通りに反映するわけではないため、一見母語転移のように見えるが、実はそれは独自の規則または言語内の転移による結果であり、一見母語転移ではない誤用でも実は習得過程において母語転移が一部働いた結果である、といった可能性がある。

そのため、本研究では新たな考察方法が提案される。それは、言語間の文法形式の対応関係と習得研究をもとに、様々な習得段階や学習環境にある学習者が実際に産出した誤用を統合的に考えることによって、学習者の習得過程における発達パターンを予測する対照研究と、文法習得に多用されている文法テストに学習者の内省を考察できるようなフォローアップ・インタビュー（以下、FI）を取り入れる習得研究を組み合わせることによって習得過程における母語転移の働き方を解明する手法である。

以上の問題意識から、本研究では、中国語話者のアスペクト・テンスの習得のうち、これまで習得される段階が同じとされてきた過去テンスの「進行中」（以下、進行中・過去）と現在テンスの「結果残存」（以下、結果残存・現在）という2用法を考察対象として、対照研究、習得研究、文法記述研究を統合した研究が行われることが述べられる。

第3章では、これまでのアスペクトとテンスにおける日中対照研究は言語形式の対応関係に止まり、中国語のテンスの文法カテゴリーがないという特徴が考察に入れられておらず、対照研究が正確に行われていないという問題点が指摘され、新たな対照研究が行われる。具体的には、日中のテンス表現を比較することで、両言語におけるテンス・アスペクト表現におけるテンスの表し方が異なり、日本語は義務的にテンスをつけて表現するのに対して、中国語ではテンス（的表現）が任意であることが指摘される。

これらの考察から、第二言語習得関係の先行研究で指摘されている結果残存・現在におけるタ形による誤用（例. ×（部屋に入ったときに）あつ、コップが割れた。（→割れている））は、学習の初期段階で主に観察され、習熟度が上がるについて出現する結果残存・現在におけるテイタ形の誤用や、進行中・過去におけるテイル形の誤用（例. 会社を出たとき、雨が降っている。（→降っていた））も母語転移の結果によるものであることが明らかにされる。

第4章では、中級段階の中国語話者7名を対象に、文法テストにFIを取り入れた調査の結果が示される。調査の結果、先行する習得研究では検討されていないテイル形（進行中・過去）とテイタ形（結果残存・現在）という誤用も観察されること、これらは従来の対照

研究の考え方からは母語転移とは無関係のように見えるが、実際には、母語転移によるものであることが明らかにされる。全体的に、中国語話者のアスペクトの習得は進んでいるものの、母語の負の転移で日本語のテンスを正しく理解できないことの影響でテイル形全体の習得が遅くなっているという事実が指摘される。

先行研究ではアスペクトマーカを用いて学習者の習得状況を解説しているが、中級段階の学習者が実際にアスペクトマーカを根拠に日本語のテイル形の使用を考えていることは少なく、独自規則が多く存在していることが指摘される。

第5章では、第4章で観察された内容の追試として、学習段階と学習環境の影響を見るために、学習段階別、環境別の変数を加え、第4章と同じような方法で行われた調査の結果が示される。また、母語転移をより深く探るために、第3章の考察結果と第4章の習得研究から母語転移の要因を細かく設定した上で、母語転移の働きによる異なる傾向が考察される。その結果、中間言語の各過程においては母語転移と学習者独自の規則が同時に働いており、母語の正の転移を受けていても学習者独自規則の負の影響で誤用になる場合と、逆に母語転移に頼らない場合でも学習者独自規則を経由して正用になる場合が観察される。さらには、文法形式上では類似性を捉えていなくても母語の発想を経由して理解できることが観察される一方、学習段階や学習環境の違いに応じて、学習者自身の発想による類似性の捉え方が異なることが指摘される

第6章では、母語を最大限に活かした日本語教育文法のための文法記述研究が行われる。

この記述が一般の学習者向け文法記述と異なるのは、母語に頼ることができるため、母語転移を活かした記述は、直接産出につながる効率的な文法指導ができることと、母語を活かした日本語教育文法の効率性が述べられる。その上で、実際に中国語話者の困難点と母語転移を生かした文法記述案が示され、学習過程に出現する誤用にも対応できるような教授案が提案される。

第7章では本研究のまとめと意義が述べられる。

3. 本論文の成果と問題点

本研究の成果は次の通りである。

第一は、母語の知識を活用した日本語教育文法という立場に立って、日本語のテイル形の基本用法（進行中、結果残存）とそれに対応する中国語の形式を詳細に比較したこと、および、その過程で、言語教育のための対照研究、母語転移、中間言語といった概念について、先行研究を十分に踏まえつつ、筆者独自の優れた解釈を与えたことである。

例えば、母語転移について言えば、通常、この概念は主に母語と目標言語の形式的類似性によって起こると考えられているが、実際には、学習者の習得段階が上がるにつれ、そうした直訳ストラテジーに基づく母語転移は少なくなるのが一般的である。その一方で、学習者の母語の発想に基づく母語転移は存在し、それに基づいて先行研究で言われる学習者独自の規則が形成される可能性もある。筆者は、こうした学習者独自の規則は中間言語の発達段階に応じて変化する可変的なものであるとしている。こうした捉え方は、母語の知識を最大限に活かした日本語教育文法を目指すという本研究において必然的に要求される方法論上の課題であるが、筆者はこの課題について、理論的にも実証的にも相当程度妥当な回答を与えることに成功している。

第二は、調査において、これまで多く用いられてきた文法性判断テストに FI を加えることによって、学習者の内面の心理を掘り起こすことに成功したことである。

文法項目に関する習得研究では文法性判断テストが用いられることが多い。しかし、単に文法性判断を問うだけでは、学習者がどのように考えてその回答に至ったのかというプロセスはわからない。筆者は文法性判断テストに FI を加えることによって、このプロセスを可視化している。その結果、表層的には同じ回答であっても、その解釈が同じではないものが存在することが明らかになった。

例えば、進行中・過去の場合、同じくテイタ形が使えない（したがって、これまでの研究では同じく誤答と見なされてきた）場合であっても、タ形と回答した場合とテイル形と回答した場合ではその内実は異なっている。すなわち、タ形と回答した場合は、過去を表す時間副詞に引きずられてタ形を使っているため、アスペクトの習得はできていないのに対し、テイル形と回答した場合には、FI の結果テイタ形と回答できた場合と、FI を経てもテイル形のままだった場合があり、いずれの場合もアスペクトは習得できているものの、後者の場合はテンスが習得できていないのに対し、前者の場合は実質的にはテンスも習得されていると判断できる。このような形で学習者の内面の理解過程を可視化したことにより、母語転移は表層の形式レベルの対応関係で起こるとは限らず、それが母語の発想に基づいて引き起こされることがあり得ることが明らかになった。

第三は、日本語と中国語の詳細な対照研究を踏まえた上で、文法性判断テストに FI を加えるという本研究独自の調査を行うことによって、日本語のアスペクト形式の習得段階をめぐる議論に実証的な回答を与えたことである。

具体的には、先行研究で同じ習得段階に位置づけられてきた進行中・過去と結果残存・現在の間には習得段階上の違いが存在し、結果残存・現在は進行中・過去よりも習得が困難であることが明らかになった。こうした結果は、中国語話者におけるテンス・アスペクト形式の習得順序に実証的な根拠を与えたものとして、研究史上重要な価値を有する。

こうした成果を挙げている本論文であるが、問題点も一部に存在する。

第一は、習得という概念に関する捉え方についてである。

本研究で明らかにされたことは、意味と形式の間の写像関係の問題であり、学習者の認知的な問題というよりも、文法の範囲内の問題であると考えられる。こうした対応関係を可視化することは、中国語話者に対する日本語教育を考える上では重要な成果であるが、それをもって直ちに習得と言ってよいかについてはさらに検討を要すると考えられる。

第二は、第一の観点に関連する調査手法についてのものである。

本研究で用いられた FI という手法は学習者の内面の意識を尋ねるための優れた手法ではあるが、そこで尋ねられる内容はあくまで学習者のメタ的知識に留まり、内面の心理の動きそのものを捉えたとは言いきれない。こうしたメタ的な知識を明らかにすることは、明示的な教授 (explicit instruction) の質を高める点において、日本語教育文法の向上に役立つことは確かである。しかし、その一方、「習得」ということを考察対象とし、内面の心理を捉えるようにするのであれば、発話プロトコル法や反応時間の測定、脳波の動きの検出といった心理の変化を直接、動的に捉えられる手法との比較が必要であり、そうした手続きを抜きに習得について論じることにはもう少し自制的であってもよかったように

思われる。このことは、「説明できる＝知っている」ということと「使える」こととは別であるという近年の文法教育の知見からに照らしても妥当であると言える。

第三は、調査対象語に関するものである。

本研究の調査では「行く、来る」のような移動動詞のテイル形は（対応関係が特殊であるという理由で）扱われていない。しかしながら、移動動詞のテイル形が結果残存の解釈しか持たないのは日本語の特徴であり、学習者にとって習得が困難な点でもあるので、この類型を取り込んでいけば、本研究の議論がより包括的なものになっていたと考えられる。

こうした問題点は存在するものの、これらは本論文全体が挙げた成果に比べれば大きな瑕疵とは言えない。また、冉氏自身もこれらの問題点に気づいており、今後の研究において、上記の問題点も確実に改善されると考えられる。

4. 結論

以上から、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、冉露芸氏に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 庵 功雄
太田陽子
稲垣俊史

2019年5月24日、学位請求論文提出者、冉露芸氏の論文「文法教育における母語転移の扱い方—中国語話者のアスペクト・テンスの習得—」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、冉氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、冉露芸氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。